

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	仲間 絢
論文題目	13世紀のバンベルク大聖堂彫刻群と『雅歌』の花嫁神秘主義		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は13世紀ドイツ・ゴシック期を代表するバンベルク大聖堂彫刻群の図像プログラムを、旧約聖書中のいわゆるソロモンの『雅歌』をめぐる解釈、すなわち「花嫁神秘主義」との関連において読み解こうと意図するもので、序と結にはさまれて以下の六つの章で構成されている。すなわち、第1章「バンベルク大聖堂彫刻群成立の歴史的背景」、第2章「『雅歌』とその受容」、第3章「バンベルク大聖堂扉口彫刻—花婿と花嫁のプログラムとして」、第4章「バンベルク大聖堂ゲオルギウス内陣彫刻群」、第5章「花嫁としての聖母マリアの戴冠」、第6章「13世紀ドイツ・ゴシック彫刻の「眼差し」と視覚的効果」、である。</p> <p>第1章ではまず、大聖堂の建立と再建の経緯がパトロンとの関係を中心に辿られるが、とりわけ重要なものとして強調されるのは、11世紀初めの創建に尽力したザクセン王ハインリヒ2世と王妃クニグンデの二人が、12世紀にはローマ教会によって列聖されていた点、および、13世紀前半におこなわれた大規模な再建において神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世が経済的援助を与えた点である。さらに、同じくこの時期に制作された彫刻群、具体的には、外部の三つの扉口の彫刻群——「君侯の門」、「慈悲の門」、「アダムの門」——と、内部の聖ゲオルギウス内陣障壁の彫刻群——《騎馬像》、《聖母マリア像》、《老婆像》等——について、フランス・ゴシック彫刻や写本等との関連から、その様式と図像の検討がなされる。次に第2章では、これらの彫刻群を解釈するための準備段階として、『雅歌』が初期キリスト教時代から中世においていかに読み継がれ注解されてきたかが跡付けられている。とりわけ本論文が目指すのは、『雅歌』における「花婿 (スponsus)」と「花嫁 (スponsa)」を、それぞれキリストと教会 (エクレジア) として読む「花嫁神秘主義」の伝統である。教会としての「花嫁」はさらに、聖母マリアや信者の霊魂にも置き換えられるが、こうした解釈の伝統が、とりわけ修道院文学や女性神秘家たちを通じて中世ドイツに広まっていたことが明らかにされる。</p> <p>これらを踏まえて第3章において、三つの扉口ティンパヌムの主題、「最後の審判」、「アダムとイヴ、ハインリヒ2世とクニグンデ夫妻の肖像」、および「聖母子像」が、いずれも聖母マリアの存在感を強調することによって、信者を「花嫁神秘主義」の世界</p>			

へと導く効果を果たしていることが論じられる。こうして教会内部に足を踏み入れると、「花婿」としての《騎馬像》と、「花嫁」としての《聖母マリア像》、さらにその母親アンナと考えられる《老婆像》と対面することになるというのが、第4章において新たに提示される本論文独自の解釈である。また、《聖母マリア像》の近くには、単体の《天使像》が据えられているが、もともとは天使が冠を差し出していたとされることから、これら二体は「聖母戴冠」の図像に対応するのではないかという仮説も立てている。

さらに第5章では、こうした新しい図像プログラムがバンベルク大聖堂の彫刻群で展開された歴史的な背景として、聖別された王妃クニグンデへの崇敬が当時高まりを見せていたこと、彼女が聖母マリアや『雅歌』の「花嫁」にもなぞらえられていたことが、『聖クニグンデの説教 (Sermo de sancta Chunigunda) 』などの一次資料から跡付けられる。最後に、中世における光学論等を踏まえながら、彫像間の眼差しの方向性や、観者の眼差しとの関係が、これら個々の彫刻を互いに結びつける要素として重要な役割を果たしていることを明らかにする。

このように本論文は、一次資料の文献、彫刻作品の現地調査、先行研究の詳細な検討等を踏まえて、これまで少なくとも日本では論じられることのなかったバンベルクのゴシック大聖堂の彫刻群に新たな解釈の可能性を提起したものとして高く評価される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、西洋にゴシック美術の展開においてきわめて重要な位置を占めているにもかかわらず、これまで少なくとも日本では取り上げられることがなかった、バンベルク大聖堂の13世紀前半の彫刻群について、一次資料の読解と現地調査とを踏まえて、『雅歌』注解における「花嫁神秘主義」という、世界的にも新しい観点から解釈を試みるもので、その独自性は高く評価される。

まず、11世紀初めにおける大聖堂創建の経緯と、13世紀前半における大規模な改築と彫刻群の制作をめぐる状況を、順にそれぞれのパトロンであったザクセン王ハインリヒ2世と妻クニグンデ、そして神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世との関係から論じる。さらに、ハインリヒ2世と妻クニグンデが、12世紀後半に相次いで列聖され、聖なる皇帝夫妻として崇拝の対象となっていた点が確認される。そのうえで、ソロモンの愛の歌、旧約聖書の『雅歌』における「花嫁(スポンサ)」と「花婿(スポンスス)」に関する婚礼の神秘主義をめぐる解釈を、オリゲネスの注解から聖ベルナルドゥスの注解へと辿り直すことで、中世ドイツのこの地方において、それが、ハインリヒ2世ととりわけ妻クニグンデの崇拝に結びついていた可能性を提起する。

こうして、バンベルクにおける宗教的で政治的な文脈を明らかにしたのち、大聖堂のゴシック彫刻群の解釈に入っていく。具体的には、三つの扉口——「君侯の門」、「慈悲の門」、「アダムの門」——と、内部の聖ゲオルギウス内陣障壁の彫刻群——《騎馬像》、《聖母マリア像》、《老婆像》等——について、その様式と図像の検討がなされる。

ここから明らかになるのは、三つの扉口ティンパヌムの主題、「最後の審判」、「アダムとイヴ、ハインリヒ2世とクニグンデ夫妻の肖像」、および「聖母子像」が、いずれも聖母マリアの存在感を強調することによって、信者を「花嫁神秘主義」の世界へと導く効果を果たしているという点である。こうして教会内部に足を踏み入れると、「花婿」としての《騎馬像》と、「花嫁」としての《聖母マリア像》、さらにその母親アンナと考えられる《老婆像》と対面することになるというのが、新たに提示される本論文独自の解釈である。「花婿」を馬にまたがる騎士とするオリゲネスの注釈などがその根拠として示される。また、《聖母マリア像》の近くには、単体の《天使像》が据えられているが、もともとは天使が冠を差し出していたとされることから、「聖母戴冠」の図像に対応するのではないかという仮説も立てている。

さらに、こうした新しい図像プログラムがバンベルク大聖堂の彫刻群で展開された歴史的な背景として、聖別された王妃クニグンデへの崇敬が当時高まりを見せていたこと、彼女が聖母マリアや『雅歌』の「花嫁」にもなぞらえられていたことが、『聖クニグンデの説教(Sermo de sancta Chunigunda)』などの一次資料から跡付けられる。当時のこの一次文献との結びつきを明らかにした点は、本論文のいちばん大きな功績といえるだろう。

最後に、これらの彫刻群は、まとまって並べられているというよりも、それぞれがほぼ単体のようなかたちで聖堂内に配置されているのだが、近年の科学的調査を参照しつつ、今日もなお各彫像が本来の位置にあることを確認したうえで、ではなぜこのように離れて置かれたのかが考察される。そのための手掛かりとなるのは、各彫像が見せる視線の方向や、身振り、衣襷の動きなどで、それらを分析することで、一見してばらばらに見える彫刻群が、観者の視線も含めて、有機的なつながりを持つことが跡付けられる。さらにそこに眼差しと光をめぐる中世における光学論——ロジャー・ベーコンやロバート・グロステストなど——との関連性を読み取っている点も、本論文の特徴である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年2月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降